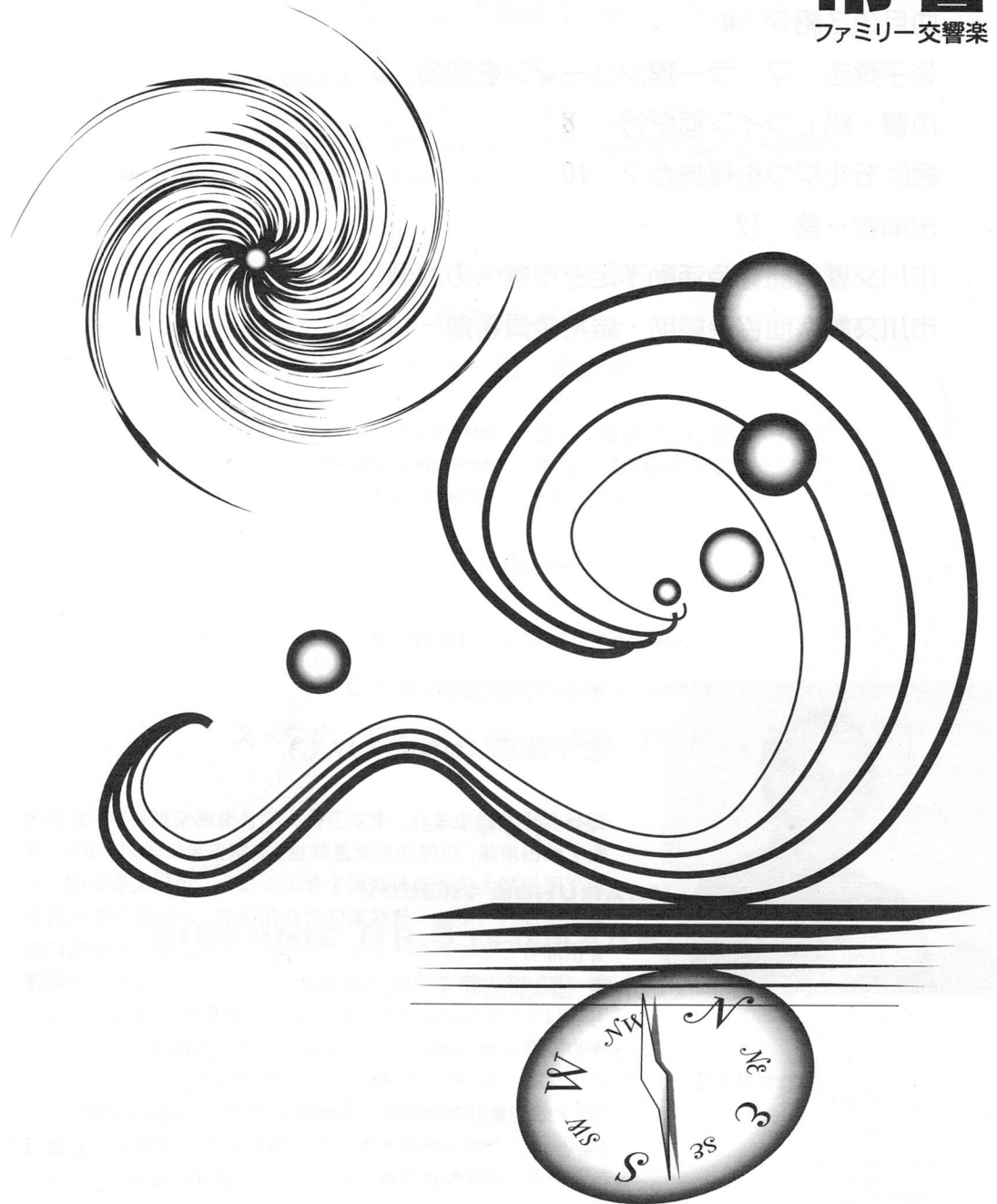


1997.12.21

市川市文化祭
第264回

市響

ファミリー交響楽

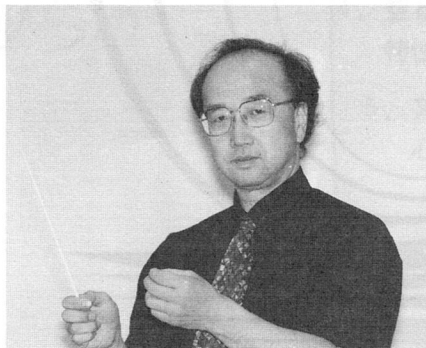


1997年12月21日(日)
市川市文化会館

主催 市川市教育委員会 市川交響楽団協会
協力 社団法人 日本アマチュアオーケストラ連盟

15.51.7991

本日のプログラム 3
 曲目のご紹介 4
 金子建志・マーラー編シューマンを語る 6
 市響・紙上ライン河紀行 8
 君はモルダウを見たか? 10
 出演者一覧 12
 市川交響楽団協会活動予定と市響へのお誘い 13
 市川交響楽団協会賛助・維持会員名簿 14/15



本日の指揮者

金子建志 (かねこ けんじ)

1948年千葉県生まれ。東京芸術大学音楽部楽理科卒。音楽理論を柴田南雄、指揮法を渡邊暁雄、高階正光に学ぶ。現在、常葉学園短期大学音楽科教授を務めるほか、市川交響楽団、千葉フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者、世田谷交響楽団名誉指揮者としてアマチュア・オーケストラ活動に積極的に加わっている。音楽雑誌〔「音楽現代」「レコード芸術」の新譜月評ほか〕での評論活動、NHK-FMの音楽番組〔「海外クラシックコンサート」ほか〕の解説者としても活躍中。

[編/解説書]「朝比奈隆 交響楽の世界」(早稲田出版)

[著書]「こだわり派のための名曲徹底分析 交響曲の名曲 I (シューベルトの<未完成>)」(音楽の友社)

制作・著作：市川交響楽団1997

このパンフレットに掲載されている写真・イラストレーションおよび記事の無断転載・使用を禁止します。

市川市文化祭 第264回市響・ファミリー交響楽

LÉO DELIBES

COPPELIA, SUITE EXTRAITE DU BALLET

ドリーブ：バレエ組曲《コツペリア》より

PRÉLUDE ET MAZURKA	序奏とマズルカ
WALZE	スワニルダのワルツ
THÈME SLAVE VARIÉ	スラブ民謡の主題による変奏曲
DANSE HONGROISE (CZARDAS)	ハンガリー舞曲 (チャルダージョ)

JACQUES IBERT

ESCALES...

イベール：寄港地

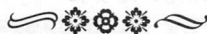
ROMA - PALERME	ローマからパレルモへ
TUNIS - NEFTA	チュニスからネフタへ
VALENCIA	バレンシア



BEDŘICH SMETANA

VLTAVA (DIE MOLDAU)

スメタナ：モルダウ (連作交響詩『わが祖国』より)



ROBERT SCHUMANN

SINFONIE NR.3 ES-DUR «RHEINISCHE»

シューマン：交響曲第3番 変ホ長調《ライン》

LEBHAFT	生き生きと
SCHERZO. SEHR MÄSSIG	スケルツォ. とても穏やかに
NICHT SCHNELL	速くなく
FEIERLICH	荘厳に
LEBHAFT	生き生きと

KENJI KANEKO, DIRIGENT

指揮：金子建志

ICHIKAWA SYMPHONY ORCHESTRA

市川交響楽団

ドリーブ：バレエ組曲《コッペリア》より

吉野淳子（ヴァイオリン）

《コッペリア》は、チャイコフスキー、ストラビンスキーの三大バレエとともに、バレエ音楽の傑作としてしばしば上演され、またこの組曲も演奏される機会が多い。そのため、作曲者であるドリーブ（1836-91）は、この曲によってバレエ作曲家としての地位を築いたと言われている（しかし私は、楽譜をもらった後でさえ、誰の作品なのか知らなかった）。初演は、1870年5月25日パリにて。大成功を収めたということだ。

この組曲の特徴は、組みかえが効くこと、つまり演奏する順番を変えることができることにあるが、はたして本日の市響の《コッペリア》はどんな感じなのか？ 曲ごとのハイライト・シーンをお伝えしよう。

1. 序奏とマズルカ

マズルカでは、やはり我がマエストロ・金子氏の躍動感あふれる指揮に注目したい。残念ながら私達は演奏中、氏の後ろ姿を見ることはできないが、ご来場の皆さまには、ビジュアル的にも楽しんでいただけるのでは？

2. スワニルダのワルツ

《コッペリア》なんて知らない！ という方、ご安心を。この曲なら聴きおぼえがあるはず。

3. スラブ民謡の主題による変奏曲

個人的に、この曲にはガッカリさせられた。気分はまるで、舟盛に残ったつま状態（そのココロは、おいしいところは、すっかりカットされて無くなってしまった）。

4. チャルダッシュ

せめて最後ぐらいは盛り上がりたい。チェロとピオラの旋律を聞いていると、なぜか「来るぞ、来るぞ！」と心の中で叫んでいる私。・・・どこがハイライト・シーンなんだか？！

イベール：寄港地

横田佐貴絵（ヴァイオリン）

「“寄港地” ってさあ、演歌の曲名みたいだよなー。」当団員某ヴァイオリン奏者]のこの一言で、私のこの曲に対してのイメージはめっちゃくちゃであった…。しかしふたを開いてみると、さすが生粋のパリジャン（イベールは生まれも育ちも、そして没したのもパリ）、不思議な魅力を感じさせる、フランス映画を思い出すような垢抜けた曲なのです。ちなみにイベールは学生時代、サイレント映画をピアノで伴奏するアルバイトをしていたらしいのですよ。幼少時からピアノの手ほどきは受けていたものの、10代の頃は演劇に興味を持ち一度は演劇科に進学し、すぐに作曲科へ転科したのですが、演劇も不快だった父親が激怒し経済的援助を打ち切ってしまったのです！ で、サイレント映画のアルバイトを。

1. ローマからパルレモへ

海の上の静かな夜明けの霧の中から始まり、やがてエネルギーが沸き上がり、幻想的な踊りはまた霧の中へ…。

2. チュニスからネフタへ

哀愁を帯びたオーボエの民族的な歌は、なんともノスタルジック。イベールは、チュニジアで砂漠の音楽家達に囲まれながら、椰子酒片手に実際に聴いた歌を基にしてこの曲の旋律を作り上げたとか。

3. バレンシア

スペインのリズムとメロディーが、強烈な色彩を放ちながら地中海の旅は終わっていくのです…。

う～ん、おフランスものにあまり縁のない市響メンバーに地中海が表現できるのか！ この原稿を書いているのは9月、今のところ「妖しい」ではなく「怪しい」演奏になっているぞー。まあ肖像画を見たところ、ちょび髭をはやしたちょっと怪しいおじさんにも見えるからいいか…。いやいや、いいわけないですね。12月までにはなんとかします。

スメタナ：モルダウ（連作交響詩『わが祖国』より）

藪崎裕至（トロンボーン）

《ヴルタヴァ（Vltava）》って、この『わが祖国』の中では確かに一番有名な曲なんですけど、やるんだったら、全曲やりたいと思います。でもまあ、全曲やっちゃうと、オーケストラ全員死に絶えますからね（爆）。特に金管は1曲毎に交代するくらいじゃないと吹けたもんじゃないですし。というわけで、今回はこの《ヴルタヴァ》だけお送りするわけですが、あの優美でまた有名な旋律とは裏腹にけっこうきつい曲であることも事実です。曲はヴルタヴァ川の流れを川辺の風景とともに描写したのですが、この曲の聞きどころを流れに沿ってご紹介しましょう。

モルダウの二つの源流 始まりました。水源のところ、フルートが聞こえて参ります。う？ん、これをやりたかったようすなあ、笛吹きの方々は。さてそのあと、川幅が広がったところでオーボエとヴァイオリンに主題が出てきますが、あ、そこ「川の流れ」なんだからブツブツ切らないでね。

森での狩り 続いて川は森を通過して、あ、ここではホルンが狩猟の笛を吹いています。どうも狩猟をするというよりは、「される」側のような人もいたりするようですが（笑）気にしないでいきましょう。

農民の結婚式 所変わって田舎の村の踊りの風景らしいですねえ。でも結婚式での踊りということですから、楽しくやって欲しいところ。

月の輝き そうこうしているうちに川は夜になり、真っ暗闇と妖怪の踊り、じゃなかった月の光と妖精の音楽。きれいにいきましょ、きれいに。はいそこ、脂汗流して弾いてちゃいけませんよ。

川はゆるやかな所ばかりじゃなく、**聖ヨハネの急流**にさしかかります。やっと思いきり吹けるぞ。えっ？ あんまり吹くと「急流」どころか「土石流」だって？ わかりましたよ、節度をもって吹きあいんでしょ。はいはい。

さて急流も一段落すると、ヴルタヴァはいよいよ大河となってプラハの街に入ってきます。すると、古城ヴィシェフラトが見えてきます。ほら、見えてきたでしょ、あなたにも。え？ 見えてこない？ そりゃオケの力不足かもしれないですね。ここらへんにくるとバテ気味の人もちらほら見受けられるかもしれません。がんばれ、もうちょっとだぞ。

さてさて古城ヴィシェフラトをも通り過ぎて、ヴルタヴァの流れはいよいよゆったりとプラハの街を過ぎ去っていくのであります（以上は当団の練習風景とは一切関係ありません）。

シューマン：交響曲第3番《ライン》

吉野智久（クラリネット）

ライン河は、スイスのアルプスに源を発し、フランス・ドイツ国境を形成した後ドイツ国内を流れ、最後にオランダから北海に注ぐ。全長約1320kmの大河である。日本最大の川、利根川の長さが約320kmであるから、その雄大さは見たことの無い私には想像の域を出ない。この河は、流域に暮らす人々にとって命の源であるばかりでなく、神々が住んでいるとされ、「父なる河」と呼ばれている。

シューマンが初めてライン河を目にしたのは、大学生の時。大学で法律を学びながらも、文学の道へ進もうか、それとも音楽の道を歩もうかと、思いを巡らせていた頃であろう。『老いて堂々とした父なるライン』の流れを目にしたシューマンの思いが、彼の旅日記に綴られている。

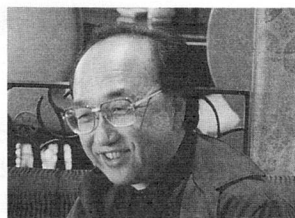
彼がライン河畔の都市、デュッセルドルフに、市立管弦楽団の常任指揮者として招かれたのは1850年のことだった。40歳にして、ようやくオーケストラの指揮者の職に就くという夢を実現した彼は、創作意欲をも取り戻した。交響曲第3番《ライン》が書かれたのは、この年である。開放的で朗らかなこの地方の人々の暮らしや自然の様子を描いたと言われている。次の年、自らタクトを振って初演した。

しかし、彼は指揮者には向いていなかった。以前から患っていた精神病も悪化した。日課であった散策の途中、ライン河にかかる橋の上からじっと長い間、渦巻く流れを見つめていたこともしばしばだったとか。そしてついに、このラインの流れに身を投じたのだった。

交響曲第3番《ライン》は、明るさと温かさと希望とに満ち溢れた曲である(?)。それとも彼の「運命の予感」のようなものがどこかに潜んでいるのだろうか？

金子建志
マーラー編
シューマンを
語る

シューマンの音楽の 可能性を浮き彫りにする マーラーの編曲



—今回は金子先生からご推薦があって、「ライン」のマーラー編曲版を取り上げることになったわけですが、そもそもマーラーがこの曲を編曲するに至った理由はどこにあるのでしょうか

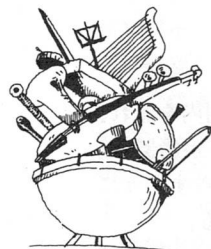
金子：マーラーに限らず、つい最近までプロの指揮者であればスコア¹⁾に手を入れるのは当然という風潮だったんですよ。「シューマンのオーケストレーション²⁾に問題あり」というのは定評のようなものですからね。よく指摘されるのは、

- 楽器の重ねすぎ：弦と管が同じ楽想³⁾を重ねて演奏していることが多く、それぞれの音色の対比が出ないうえエネルギーロスが大きい。
- 金管や打楽器の使い方が唐突：弦・管・打のダイナミクス⁴⁾がほとんどいつも同じなので、音量の大きい金管や打楽器が旋律を消してしまったりして響きがアンバランスになる。
- ピアノ音楽を単純にオーケストラ譜に置き換えたような中途半端さ：大人数の合奏ではアンサンブルが難しかったり、何となく居心地が悪かったりする。などですが、こういう指摘が常識化していたためにほとんどの指揮者が金管やティンパニを削除したり、音量を変える指示をして演奏していたわけです。

—この曲が発表された当初からそのような評価だったのでしょ

うか

金子：いいえ、初演当初(1851年デュッセルドルフ⁵⁾。指揮はシューマン自身)は、それほど否定的な見解ではなかったのです。しかし、このころは管楽器が大きく改良されていった時代で、特に金管楽器はバルブ⁶⁾の発明によってこれまで演奏



楽器の重ねあき

できなかつた半音階が自在に演奏できるようになるという革命的な進歩が起こっていたのですが、オーケストレーションもそれにあわせてより鮮明で機能的な書法を評価するようになっていきました。シューマンの書法はその流れの外にあったのですね。

また当時シューマンとライバル視されていたワーグナーの一派を中心に「シューマンの音楽はピアノ曲を下手にオーケストレーションした以外の何物でもない」という否定的な評価があって、「管弦楽法に無知なピアノ作曲家のスコアから、その音楽を救い出すことこそ指揮者の使命」という風潮が生まれ、それが今日まで続いてきたというわけです。

—ということはマーラーもそのような姿勢で編曲をおこなったのでしょうか

金子：マーラーの編曲を考えるにあたって考慮しなくてはならないのは、マーラーは当代随一のオーケストラを率いた大指揮者であったと同時に、交響曲を中心に多くの仕事をなした作曲家であり、更には彼自身が優れたピアニストであったということです。ピアニストにとってシューマンのピアノ曲は天才の証以外の何物でもありません。彼自身はワーグナーに心酔していたのですが、ワーグナーのシューマン批判に対しては「たぶん、質の悪い、訳のわからない演奏に惑わされたのだらう」と語っています。マーラーは単なる批判から出発したのではなく、シューマンとその音楽を愛していたからこそ、シューマンの音楽の可能性を浮き彫りにしなくてはならないという使命感に燃えて、独自の編曲版を作り上げていったということだと思います。

—具体的にはどのような点が目立つのでしょうか

金子：そうですね、目立つ点で一番多いのは和音を吹きのばしている管楽器や、リズム補強のために叩きつけている打楽器(ティンパニ)の整理(削除)ですね。あと曖昧だった楽器毎の音量指定を書き込み直したりという点は徹底しています。このようなマーラーお得意の積極的な音量操作によって、特に1楽章と5楽章では立体的な遠近感が見事に表現されています。このほかオリジナルでは伴奏パートを吹いていたトランペットに旋律を吹かせることによってメロディラインの輪郭を明らかにしたり、リズムパートを演奏しているトランペットやティンパニを突然休ませることによって、透かし彫りのような効果をあげるなど、マー

*1 一般的には指揮者が使用する総譜(オーケストラ全員の楽譜が印刷されている楽譜)のことを指しますが、転じて楽譜自体のことを指すことがあります。

*2 管弦楽法。曲の中での楽器の使い方をいいます。

*3 メロディ

*4 音の強弱を指します。p(ピアノ)やff(フォルテシモ)というような記号で表されますが、言葉で指定されることもあります。

*5 ライン河畔に位置するドイツ最大の都市の一つ。ノルトライン・ヴェ

ストファーレン州の州都でハインリヒ・ハイネを輩出したことで有名。またシューマンやメンデルスゾーンが活躍したことで知られる。表面酸酵で作られた赤褐色のアルトビアが実に美味で有名

*6 操作によって流体の流れを変更する装置。金管楽器ではピストンバルブ(空気の通り道を、縦に押し込んで変える)やロータリーバルブ(回転させて変える)がよく使用されます。ウイーンのみで使用されるウイナホルンという特殊な楽器ではウイナバルブという装置も使用されています。

ラーらしい手法が随所に見られます。

—最初に「マーラー編」という話を聞きまして、オリジナルに出番のないチューバ奏者としましては、大変期待していたのですが

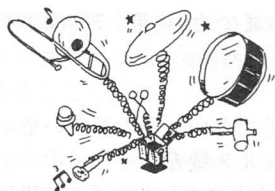
金子:それは、残念でしたね(笑)。同じくマーラーが編曲した第9(ベートーヴェンの交響曲第9番)では、元々出番のないチューバが低音補強のため追加されていますからね。シューマンの編曲においては、マーラーは重ねすぎた楽器の整理をしてオーケストレーションのコンセプトを明快にする方向を向いていて金管楽器や打楽器の補充はしていません。

—譜読み^{*7}ではホルンが突然ゲシュトップ^{*8}で演奏しはじめてびっくりしました

金子:第1楽章の展開部の終わりから再現部にかけてのところでですね? ゲシュトップにしたことで音色・音量の分水嶺が明確になったと思います。続く小節ではフォルテの指定をピアノシモに変えて、「すり鉢の底」だということを表現しています。確かにこの曲を知っている人ほど驚くかもしれませんね。

—この部分を始めとして、全体にわたってホルンの変更点が多いような気がします

金子:それには先程出てきた楽器の性能の向上が大きく影響していると思います。1830年代から1850年代にかけて、バルブの発明によって均一の音色を正しい音程



唐突な金管楽器や打楽器の使用

で吹くことができる楽器が普及し始めます。しかし主に経済的な問題からすべてのホルン奏者が高価な最新式の楽器で演奏できたわけではないため、この時期には第1・第2ホルン

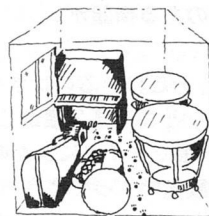
を新しいバルブホルン、第3・第4ホルンを従来のナチュラルホルンで書き分けるという折衷的な手法がよく使われました。これはこの時期のワーグナーも採用していた一般的な方法で、シューマンも第3・第4のホルンの譜面はナチュラルホルン用に自然倍音列の中で書いているわけです。今度出た(シューマンの)新全集版では、その辺りもきちんと直され、1・2番はバルブホルン、3・4番はナチュラルホルンとして印刷されているんですよ。マーラーはこれをすべてバルブホルンで書き直しています。彼はウイーン国立歌劇場の音楽監督として最新の楽器と最高の奏者を使用できる

立場にあったわけですから当然だったのでしょうかね。
—マーラーはこの編曲版でずいぶん演奏をしたのでしょうかね

金子:それが記録によると意外に少なく、実は一度だけなのです。

—え、一度ですか

金子:「ライン」は1911年の1月31日と2月3日に同一プログラムでニューヨークで演奏しているだけなので実質1回きりです。



居心地の悪さ

マーラーはこの年の2月21日の同じニューヨークでのコンサートが最後の演奏となり、5月18日に51歳の誕生日を目前に没しています。編曲もニューヨーク時代におこなわれたので、まさに最晩年の仕事だったわけです。

—そういう状況の譜面がよく残っていたものですね

金子:マーラーは自身で編曲したシューマンの交響曲を出版するように言い遣っていたのですが、結局未出版のまま貸し譜となっていました。第二次大戦後ずいぶん経って、ユニフェルザール社^{*9}がマーラー手書きのスコアから変更点を反映した指揮者譜とパート譜を用意したようですが、現在でもこの譜面は一般に売られているわけではなくて貸し譜のままです。しかし、実用的な印刷の形になったのは喜ばしいことだと思います。ジュリーニやチェッカーのCD^{*10}が示すように、需要が増えてきたせいでしょう。

—市響も取り上げたことですか(笑)

金子:マーラーは自作曲では詳細にテンポ指定を行っていますが、この編曲版ではテンポの追加指定はほとんどありません。おそらく演奏回数が少なかったことが影響しているのではないかと思います。今回は私のマーラー解釈によってこの辺りを明らかにしたいと思っています。

—マーラーが浮き彫りにしたシューマンに市響の演奏がどこまで迫れるか、お話を伺って大変楽しみになってきました。いろいろと貴重なお話をどうもありがとうございました

なおマーラーの詳細な編曲分析については金子先生の著書^{*11}をご参照ください。

*7 初めての曲を合奏する前に、まず各奏者が事前に十分な練習を重ねておいたうえで、一度曲を止めずに合奏してみることをこう呼んでいます。オーケストラは普段の合奏では難しい場所を細切れで練習することが多いので、曲の全体の雰囲気やオーケストラ全員が共有しようという目的で行われます。

*8 ベルに入れている右手でわざと空気の通り道をふさぎ、潰れた音を出す、ホルンに特有の奏法です。

*9 Universal Edition, Wien. ウィーンの音楽関係の出版社でマーラー以降

のウイーンで活躍した作曲家の楽譜を多く出版しています。

*10 ジュリーニ指揮 / ロサンゼルスフィルハーモニー管弦楽団 ボリドールF35G20036・チェッカー指揮 / ベルゲンフィルハーモニー管弦楽団 BIS BIS-CD-394

*11 こだわり派のための名曲徹底分析「マーラーの交響楽」金子建志著 音楽の友社 1994 ISBN4-276-13072-7 定価税込み ¥2,900



市響・紙上ライン河紀行



ROMANTISCHE RHEIN

ここはフランクフルトの中央駅。前方の人ごみの中に見覚えのある横顔が...

あれ、そこにいるのはトキタさんじゃないですか、何でもこんなところに？懐かしいなあ。

え、出張でドイツにきたのでこれからフランクフルトの市内観光ですって？うーん、フランクフルトって見るところないんですよ。住んでる私が言うんだから間違いない。それより時間があるのなら一緒にラインでも見に行きませんか？

ラインはスイスアルプスのゴッタルトからオランダ・ロッテルダムで北海に注ぐ全長1,300kmの国際河川です。スイス・フランス・ドイツの国境を流れるラインは、マインツで直角に流れを変えますが、ここからコブレンツ付近までが「ロマンチックライン」と呼ばれ観光のメッカとなっています。

時刻表によると10分後に出発のSバーンS14がありますから、これでヴィースバーデンまで行って乗り換えることにしましょう。あ、トキタさんそのコブレンツ経由ケルン行きの列車はだめですよ。そいつライン河の左岸走りますから、右岸を行きたいからヴィースバーデンで乗り換えましょう。

①④ ヴィースバーデン行きは定刻に発車。

アナウンス？そうですね車内では到着のときにアナウンスありますけど、それにしても駅名言うだけで、発車しますとも何とも言いませんね。でも大丈夫ですよ。さて空港駅の次がマインツ。トキタさんホルン吹きだったらマインツは巡礼の地ですけど、まあいいや。ええとすぐにヴィースバーデンにつきますから、コブレンツ行きの鈍行に乗り換えますよ。15:00ちょうどのD6128です。

⑥①②⑧ コブレンツ行きも定刻に発車。

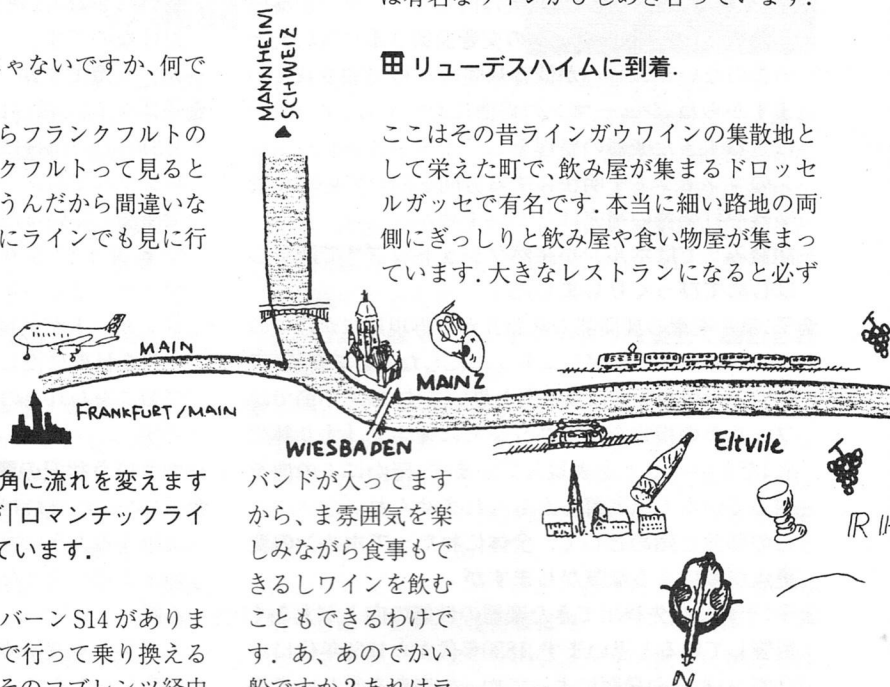
このヴィースバーデンはその昔は王侯貴族、特にロシア貴族が好んだ湯治場だったそうです。ロシア正教会風の教会とか残っていますよ。あ、そこの橋見えませんか？これはアウトバーンなんですけれど、実はこれを過ぎるとコブレンツまでラインには橋がないんですよ。

ラインが左の窓に見えてきました。このあたりは川幅も広いし結構道に近いところに水面がありますよね。我々が列車で走っているあたりはラインガウと言いますが、ドイツきっての高級ワインの産地なんです。特にこ

の付近エルトヴィルやヴァインケルのあたりは有名なワインがひしめき合っています。

田 リューデスハイムに到着。

ここはその昔ラインガウワインの集散地として栄えた町で、飲み屋が集まるドロツセルガッセで有名です。本当に細い路地の両側にぎっしりと飲み屋や食い物屋が集まっています。大きなレストランになると必ず



バンドが入ってますから、ま雰囲気を楽しみながら食事でもできるしワインを飲むこともできるわけです。あ、あのかい船ですか？あれはライン下りの観光船です。ここからだコブレンツまで約4時間、7時間半でケルンまで行けます。

さて、ふり返って見てください。あの黄色い塔が立っている城がエーレンフェルス城①、そして中州に立っている黄色の塔、見えますか？あれがネズミの塔②です。両方とも元々税関としてマインツ大司教が建てたものです。ある時飢饉がありましてね。住民が領主である大司教に食物を分けてくれと頼みに行ったわけです。時の大司教は欲張りでね。食物を分けてやるふりをして空の穀物倉庫に人々を押し込んで火をつけちゃったんです。そうしたら火の中から彼めがけて何千匹ものネズミが押し寄せてきて、びっくりした彼は河の中州ならばネズミもこれまいとこの塔に隠れたのですが、大挙して河を渡ってきたネズミは彼を噛み殺してしまっただけです。

この辺からずいぶんと谷らしくなってきましたよね。あそこの中州に船のような形をした城が建っていますよね。あれがプファルツ城③。やはり税関として14世紀にバイエルンのルードヴィヒ4世が建てたものです。ラインは昔から交通の大動脈で、また河畔には多くの小領主がひしめいていたこともあって数多くの税関が建設されました。13世紀末には44もの税関があったそうですよ。プファルツ城は今は博物館になっていますから渡し舟で渡って中を見学することができます。右上をふり返

るとグーテンフェルス城 ⑩、そして対岸がシェーンベルク城 ⑨です。

田 カウプに到着.

トキタさん、あれ見えます？平たい船の上に車がつまれているでしょ？あれ渡し舟 ⑥なんです。橋の代わり。この渡し舟、結構あちこちにありまして、ヴィースパーデンとコブレンツの間で車が乗れる渡しが6箇所、人だけの渡しも9箇所もありますから、まああまり不便ではないんでしょうね。なぜ橋を架げないんだろうかですか？交通の大動脈なので工事がしづらいか費用がかかるとかという問題もあるでしょうね。日本ではさしずめ

田 ザンクトゴアルスハウゼンに到着.

駅のホームからうしろを見上げるとねこ城 ①があります。別に猫をいっぱい飼っていたというわけではないんですが、14世紀にここのカッツネルンボーゲンという領主が建てたので、単に縮めてブルクカッツ、「ねこ城」と呼ばれるようになってしまったと。で、もう少し行くと同じ側に... あ、見えてきましたね、あれが「ねずみ城」①です。正式にはブルクトゥルンベルクってなんですが、誰もそんな名前では呼びません。なんでも「ねこ」のカッツネルンボーゲン伯爵が「この城に比べてあんてちんけな城だか！」と言ったとか言わないとかで「ねずみ」と呼ばれるようになってしまったらしいんですよ。

このあたりから急に川幅が広がってきて谷も終わりという雰囲気になってきます。

田 ブラウバッハに到着.

ここはバラ祭りで有名な小さな美しい町なのですが、ここに聳えるマルクスブルク ④がまた美しい城でして、建立以来一度も破壊されたことがないんです。この付近は昔から交通の要所で幾度となく戦争が起こっていますので、無傷の城は確かここだけのはずですよ。それで中世の美しい装飾や品々がかなりよく保存されていて、特に騎士の間や礼拝堂は寄っていく価値があります。またこの城のテラスからのラインの眺めはもう素晴らしいんですよ。もう、コブレンツですよ。とっぷり日もくれて。

26128 16:59 コブレンツに到着.

今日は楽しかったですねえ。これからどうされますか？ え、予定はない？ じゃあいいメキシコ料理屋がありますから、そこに行きましょう。あ、トキタさんあれ見てください。そう対岸のでかい城、あれがエーレンブライトシュタイン要塞です。昔はトリアーの大司教の拠点になってたのですが、19世紀にはいってプロイセンが修復しました。今度お見えになったときにはぜひ。

人気のない石畳の市庁舎広場を2人、足早に去っていく...



トンネル掘ろうかという議論になるのですが、国民性の違いもあるでしょうね。

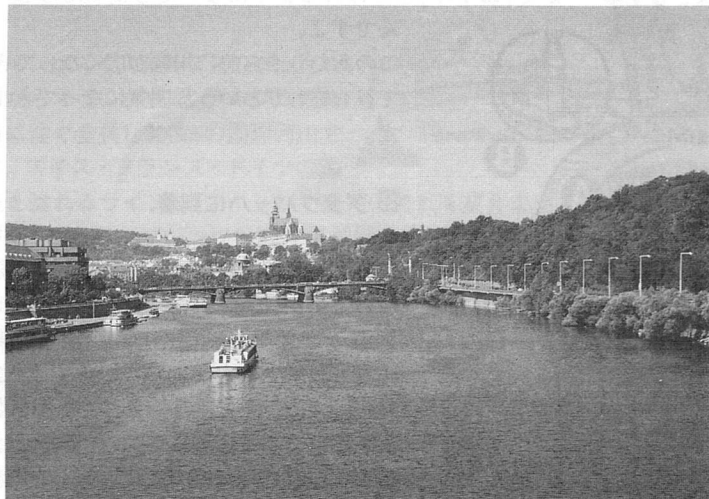
2 さあ、一層谷が険しくなってきました...『ローレライにさしかかります』...さすがに車掌もアナウンスしてくれますね。前に特急に乗ったときは例のローレライの歌を車内放送で流してましたっけ。ローレライの話はご存じでしょうが、ここで幾多の男達が美しい娘の歌声に聞き惚れてしまい、川底の岩に船をぶつけて命を落としたという言い伝えです。確かに河が突然カーブしているでしょう？幅もたった90m、さらに川底が浅いせいで流れが突然急になってしまうんですね。今でも大きな船が通っていく姿にはスリルがあります。え、どこがローレライかって？ すみません、今トンネルに入る前にちらっと見えた、あそこがそうなんです ⑥。あはは、ほんの一瞬でしたね。

亀井玲子・モルダウの旅

君はモルダウを見たか？

今回とり上げた『モルダウ』。学校の音楽の時間に習うぐらい有名な曲なのに「本物見た」という話は聞かないなあ...なんて思っていたらいました！ この夏モルダウを見に行ってきたという、当団ヴァイオリン奏者亀井さんにご登場いただくことにしましょう。

きょうの演奏会では、川の名前がついた曲が2曲とり上げられています。ラインのほうは「紙上ライン河紀行」でお楽しみいただくことにして、この夏、母と東欧4か国を旅してきた私は“モルダウ”をご紹介します。



“モルダウ”は南ボヘミアに源を発し、チェコを南北に流れるヴルタヴァ川のドイツ名です。ヴルタヴァ川はプラハの先でエルベ川に合流したのち、ドイツを経て北海へと注いでいます。

初日にプラハ城を訪れたあと、旧市街地に向かうバスの車窓から初めてヴルタヴァ川が見えたときは、「ついに本物のモルダウを見た！」と、思わず心の中で叫んでいたのです。



銀色に輝く水面に船がゆったりと浮かび、対岸にはいかにもヨーロッパらしい中世風の街並みが並んでいます。これは映画『アマデウス』の撮影にも使われたという風景です。➤



上段：カレル橋遠景

中段：カレル橋とプラハ城

下段：カレル橋たもとのレストラン

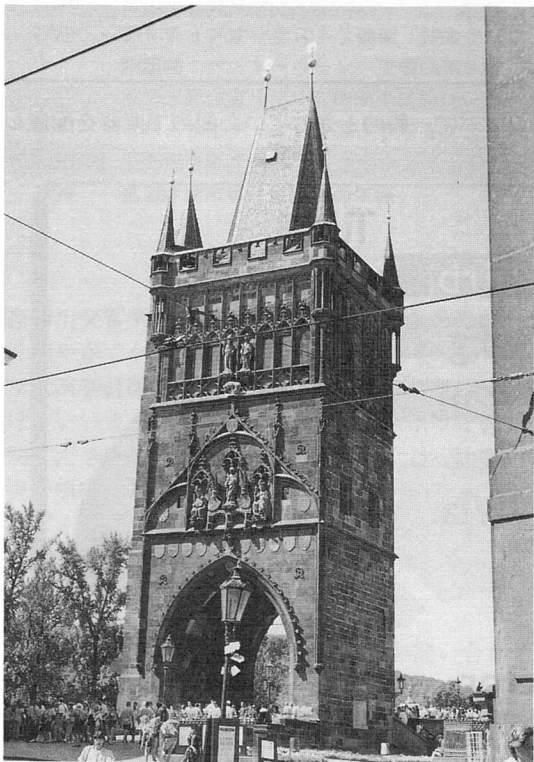


カレル橋の上はまさに歩行者天国

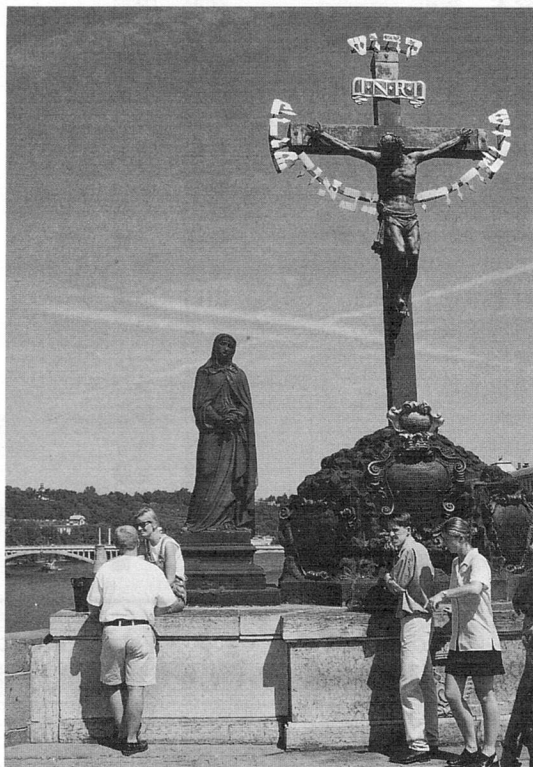
カレル橋の上は大勢の人でごった返していましたが、それとは対照的に、丘上の王宮や、美しい街並みを映す川面をカモメが飛び交い、白鳥がのんびりと浮かんでいる情景を眺めていると、20世紀にいることが不思議に思えるほどでした。

翌日、プラハからスロヴァキアの首都ブラチスラバへと向かうバスの中で、突然『モルダウ』のメロディーが流れました。ガイドさんは何も言いません。この曲に寄せるチェコの人々の特別な思い入れ・誇りが感じられました。延々と続く草原や森林を眺めながら聴いた『モルダウ』——かつてスメタナもこ

旧市街側のカレル橋の橋塔



“百塔の街”プラハには、さまざまな形の美しい塔が立ち並び、また市内にはいくつかの橋が架かっています。中でも有名なのはカレル橋です。この橋は14世紀に造られた石橋で、長さ520m、幅は10m。左右の欄干には、かの聖フランシスコ・ザビエルをはじめ、17～19世紀に造られたという、30体の聖人の像が並んでいます。それぞれが青空をバックにそびえ立つ姿は、まさに芸術作品といった趣です。



石像が並ぶなかで唯一の木製十字架
(飛行機雲もクロスしている...)

の風景の中に生きていたのだなあと、感慨ひとしおでした。この曲を書いたころ、スメタナは聴力を失っていたそうですが、彼の心の耳には、祖国の自然のいぶきがしっかりと刻みこまれていたのでしょう。

このあとドナウの真珠・ブダペストや、音楽の都・ウィーンを訪れましたが、もっとも鮮やかに心に残っているのはやはりプラハ、そしてヴルタヴァ川です。

文と写真：亀井玲子

市川交響楽団・本日の出演者

コンサートマスター
福原 祥子

ヴァイオリン

石本 恵理
亀井 玲子
河村 智行
木本 幸子
崎田真美子
鈴木 薫
須永 恒雄
高田 賀夫
竹内 甲
竹内 まり
堤 哲児
堂本 祐司
永田 匡
二宮 伸雄
根守 弘和
久田しげ子
平野 弘子
福原 亜希
本田真知子
松延 裕子
溝田 範子
村上 葉子
村田 康代
横田佐貴絵
横田富美子
吉岡 一郎
吉野 淳子
渡辺 昭子

ヴィオラ
浅野さとみ

内田 綾美
斎藤十一郎
相馬 正典
竹内ひとみ
奈良林弘子
原口 博司
星 乗昭
水野 桃子
村上 賢一
横田 行雄
若林 繁
渡部 玲子

チェロ

池田 寛之
倉沢 由和
沢田 恵子
瀬川 清
田頭 扶
中村 公一
根岸 朋子
野中 能久
樋口 進
日澤 優
福原 耕二
山口 勝規
横田 朝之

コントラバス

池田 和正
上村 啓介
菊池 克彦
長谷川隆子
村上 信乃
八鍬 健

フルート
木村 純一
木村真諭紀
佐藤 洋行
篠原 梨恵

オーボエ

荒井 淳
鈴木 宏子
二村 直子
山地 順子

クラリネット

井垣 貴嗣
一瀬 直美
多田 準也
時田 雄
半藤 嗣人
吉野 智久

ファゴット

井原 利明
金坂 哲
菅原 斉
南 恭子

ホルン

越塚 康央
近藤 利昭
嶋村 恒夫
林田 朋子
藤井 茂司
山内 正晴
山本 恭子

トランペット
安藤 宣明
一桙 泰一
近藤 悦子
新井本昌宏

トロンボーン

五十嵐じゅん
佐野 義人
古屋 義和
藪崎 裕至

チューバ

谷口 浩

打楽器

市原 秀彦
岩橋 正治
大平 雷太
岡本 真樹
児玉 和人
瀬川 順子
武井 勝美
谷口 仁美
都筑 裕

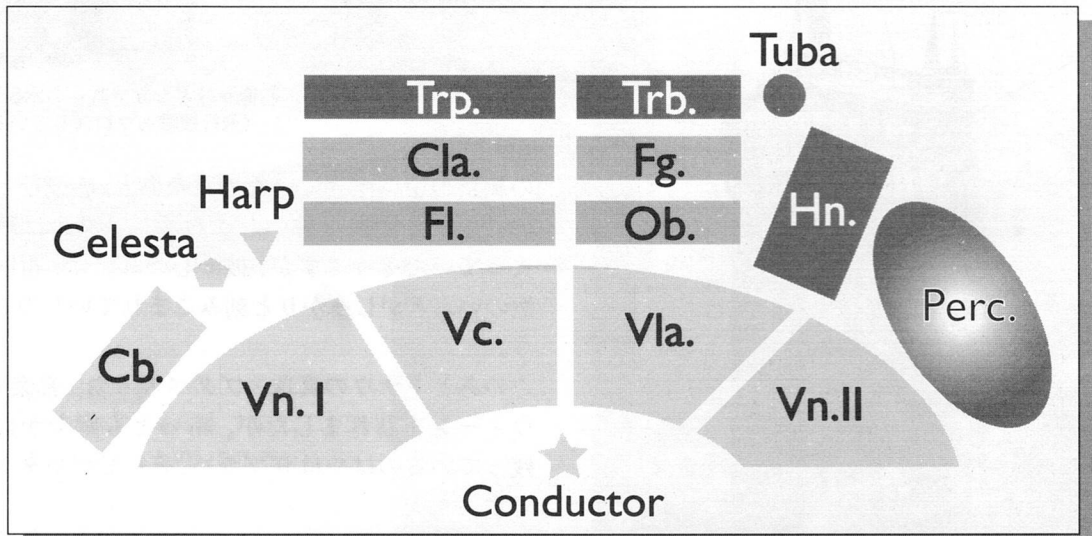
ハープ

片岡 詩乃

チェレスタ

半藤 陽子

本日はシューマンやマーラー、スメタナが活躍した時代にヨーロッパで一般的とされていた配列で楽器を配置しています。弦楽器の掛け合いの妙をお楽しみください。



Conductor: 指揮者 Vn.I: 第1ヴァイオリン Vn.II: 第2ヴァイオリン Vla.: ヴィオラ Vc.: チェロ Cb.: コントラバス Fl.: フルード Ob.: オーボエ
Cla.: クラリネット Fg.: ファゴット Hn.: ホルン Trp.: トランペット Trb.: トロンボーン Tuba: テューバ Perc.: 打楽器 Harp: ハープ Celesta: チェレスタ

平成9年度 市川交響楽団協会活動予定

平成9年

5/5	第260回市響「第22回市響ジュニア定期演奏会」 チャイコフスキー 交響曲第5番 他 指揮 山崎 滋	市川市文化会館
5/15	ドイツアマチュアオーケストラフェスティバル	ハンメルブルク
5/17	音楽ギャラリー	市川公民館
5/25	市川市文化集会	市川市文化会館
6/21	音楽ギャラリー	市川公民館
6/22	市川市管楽器研究演奏会	市川市文化会館
6/22	千葉県合唱祭	習志野文化ホール
7/6	第261回市響「交響楽の午後」 ブラームス 交響曲第2番、ピアノ協奏曲第1番 ピアノ独奏 野原みどり 指揮 吉田 裕史	市川市文化会館
7/31	利根川治水120周年記念式典	市川市文化会館
8/8-10	第25回全国アマチュアオーケストラフェスティバル浜松大会	アクトシティ浜松
8/24	第262回市響「市吹納涼コンサート」 レスピーギ ローマの祭り 他 指揮 佐藤 宗男	市川市文化会館
9/20	音楽ギャラリー	市川公民館
9/28	平和コンサート	市川市民会館
10/5	第263回市響 国際友好「オーケストラと合唱」 ヘンデル「メサイア」より、ベートーヴェン 交響曲第9番「合唱付」他 指揮 三原 明人 市川混声合唱団 行徳混声合唱団 市川第九市民合唱団 フィンランド・クオビオ市立管弦楽団	市川市文化会館
10/25	音楽ギャラリー	市川公民館
11/2-3	第12回国民文化祭かがわ'97 オーケストラの祭典	香川県・丸亀市民会館
11/9	ちばまなびフェスティバル'97「しあわせコンサート」	幕張メッセ
11/16	市川市合唱祭	市川市文化会館
11/22	音楽ギャラリー	市川公民館
12/13	クリスマス・コンサート	市川公民館
12/21	第264回市響「ファミリー交響楽コンサート」 イベール／交響組曲「寄港地」 シューマン（マーラー編）／交響曲第3番「ライン」他 指揮 金子 建志	市川市文化会館

平成10年

2/21	音楽ギャラリー	市川公民館
2/22	アマチュアオーケストラ連盟「弦楽クリニック」 課題曲：ベートーヴェン 交響曲第3番「英雄」	松戸・森のホール21
2/22	第265回市響「市川交響吹奏楽団コンサート」	市川市文化会館
3/1	リバーサイド・オーケストラフェスティバル	かつしかシンフォニーヒルズ
3/26-28	全国青少年オーケストラキャンプ	豊橋市文化センター
3/29	第266回市響「室内楽の午後」	市川市文化会館

市響へのお誘い

当市川交響楽団（市響）は、いろいろな職業をもつ幅広い年齢層の団員で構成されており、アットホームで楽しく和やかでかつめんどろ見がよいことをモットーとしている市民オーケストラです。社会人の方で、オーケストラで演奏経験のある方、前にやっていてずっと弾いていないけどまた始めたいな、こちらに引っ越してきたのだけどいいオケないかな、一度オーケストラで皆と一緒に演奏したいな、といった方は当市川交響楽団にぜひご参加ください。また市川交響楽団協会には、歌を歌いたいのだけどという方にぴったりの市川混声合唱団、行徳混声合唱団、いや私はブラスバンドがいいなという方には市川交響吹奏楽団、高校生以下の学生の方には市響ジュニアオーケストラがございます。こちらにもぜひどうぞ。

1999年8月には、わたしたちが幹事団体となって、全国アマチュアオーケストラ団員が集う「アマオケフェスティバル市川大会」が開催されます。

見学や入団ご希望の方は、下記あてお問い合わせください。

市響インスペクター 時田

TEL 03-3600-0063 / FAX 03-3600-0293

市響インターネットホームページ <http://plaza8.mbn.or.jp/ichikyo/>